〔八雲御抄三上地儀〕田○中略　民の草○中略　とみくさ○田の花也○中略　なかひこのいねことしあたらしきいね也、神に奉るなり、

〔言塵集五〕稻　とみ草　民の草原

〔藻鹽草三地儀〕田

富草あすよりはそともものをだに袖ぬれてと草のさなへうへつらんかも、とみとはよまず、これ稻の異名也、○中略　すめらみ草也いれ

〔倭訓栞前編十八登〕とみくさ　富草と書り、梁塵抄に稻をいふと見えたり、されば相模家集に、み山なるとみくさの花といひ、詞花集に、

打むれて高倉山につむものはあらたなる世のとみくさのはな、とよめるは、山に意あるにあらず、高倉山は、伊勢外宮の山也、

〔枕草子四〕りんじのまつりのでうがくなどは、いみじうおかし、○中略夜ふけぬれば、猶あけてかへるをまつに、君だちのこゑにて、あらたにおふるとみ草の花とうたひたるも、此たびはいますこしおかしきに、○下略

〔神樂歌入文下末〕閑野

あめなるひばり、よりこやひばり、とみくさ、とみくさもちて、

抄云、富草は稻を云也、今按にとみ草の事、いろ〳〵云て慥かならぬことなれど、此歌にては御說も似つかはし、

〔詞花和歌集十雜〕後冷泉院御時、大嘗會主基方御屏風に、備中國たかくら山に、あまたの人花つみたるかたかきたるところによめる、　藤原家經朝臣

打むれてたかくら山につむ物はあらたなるよのとみ草のはな

〔詞林采葉抄九〕水陰草　當集第十卷歌云